Daichi Hoshino

出逢いをバネに
前途洋々
星野大地

ヴァイオリン デモンストレーター／3歳よりピアノ教師の母親の影響で、ヴァイオリンを始める。中学時、音楽高校を目指す中で出逢った、作曲家・アレンジャー・バンドネオン奏者の啼鵬に師事したのをきっかけに、作曲・MIDI・クラシック以外のジャンルへの音楽に興味を持つ。武蔵野音楽大学卒業後は、ヤマハエレクトリックバイオリン デモンストレーター・インストラクターとして現在も活動。また漫画家の二ノ宮知子さんへの取材協力をしている。また、音楽機材（MIDI機器やエフェクターなど）を生かしたヴァイオリン演奏活動や、着メロなどMIDI制作の仕事で活動中。現在はROCKからJAZZへと幅を広げようと、昔から尊敬していたJAZZヴァイオリニストであり、作曲家でもある、中西俊博さんにアドバイスを受けている
http://sound.jp/evn/TOP.htm

お気に入りの1曲

「この素晴らしき世界」ルイ・アームストロング

「空が素晴らしい、雲が白くていいですね。虹がきれいでいいですね」しかないけど、フィーリングがばっちり合った曲です。クラシックとか、ジャズとか関係なくいい曲。シンプルなのに、平和で、一本筋が通っている感じがいい。でも明日になったら、バッハの無伴奏聴いているかも。チェロのほうが好きかな。ヴァイオリンのCDも100枚くらいあるけど、意外と自分の楽器じゃないものへの憧れもあって、それで作曲もやったりするんだろうな、と思います。

The future vastness, Daichi.

D.Hoshino

現在25歳の大地君は、音大在学中に二つの大きな出逢いを経験した。一つは、ヤマハと。ヤマハが弦楽器の世界で新しい地平を開こうとしていた2000年、演奏スタッフのオーディションがあった。「アコースティックヴァイオリンでクラシックを弾く」課題に対して、大地君は、「エレキのヴァイオリンにエフェクターをつないで、ぎゃんぎゃん弾いたんです。帰れといわれるか、面白いといわれるか半々かな」と思いながら演奏。それがヤマハを面白がらせ、即採用。以来、人なつこいマスクとサービス精神旺盛な人柄で、ヴァイオリンの面白さで全国行脚するYAMAHAエレクトリックバイオリンのデモンストレーター、インストラクターとして大活躍だ。

一方で、『のだめカンタービレ』で大ブレイクした漫画家二ノ宮知子さんと出逢ったのも同じ頃。「ヴァイオリンを弾く人ってどんな感じ?」という疑問から紹介されたのが大地君だった。例によって、エレキのヴァイオリンをガシガシ演奏。そのまま「峰龍太郎」のキャラに活かされたのは有名な話だ。「二ノ宮先生のご主人がやっているロックバンドにも仲間入りしましたし、『のだめ』のためにCDを鞄いっぱいに詰め込んでは資料提供もしてきました」という。漫画家の取材は意外な視点があって興味が尽きない。「ポジション移動した時にどのくらい指開いてる?」など普段意識していない質問が新鮮だという。今回の撮影では長髪をばっさり切った。「こんな弾き方もしています」と茶目っ気たっぷりな表情は、大地君ならではの笑顔。MIDI制作の仕事に没頭する日々が続いても、この明るいキャラは変わらず。今後の活躍に要注目だ。

text◎Sosuke OTANI photo◎Hideki SHIOZAWA costume◎Mon tsuki